

機関リポジトリ:

見所・泣き所・堪え所・勘所・落とし所

土屋俊

(千葉大学)

要点

- 「機関リポジトリ」の大学にとっての必要性、有用性を説く時代は終わった。
- 「機関リポジトリ」の大学図書館にとっての必要性、有用性を説く時代は終わった。
- もうやめられない
- どのように構築し、どのように維持するかを議論する時代にはいった
- この時代は、すべての国の機関リポジトリにおいて同じ時代である
- キャンパスにおける図書館サービスの中の位置づけを明確にする必要がある

とはいうものの、

- とりあえずは、Cliford Lynchの定義を採用：
a university-based institutional repository is a set of **services that a university offers** to the members of its community for the management and dissemination of digital materials created by the institution and its community members.
ie. Organizational commitment to **stewardship of digital materials**:
 - organization
 - access or distribution
 - long-term preservation

確認事項としては

- あるレベル以上の大学にとっては必要な機能(最初の段階では「大学」にとってであって、「図書館」としてではないことがポイント)
- この機能は、通常の大学では図書館がもっとも効率的に実現するはず:とくに、
 - 電子資源の管理という観点
 - 外からはライセンシング・内からは機関リポジトリによる発信
 - 資料の蓄積・保存・整理という観点
 - メタデータ管理。しかし、既存の「目録」の発想では不十分
 - 教育・研究への普遍的な支援という観点
 - 実はこれが一番弱いのが現状⇒faculty-library relationshipの見直しの必要性
 - 図書館間協力の新しい次元

何を集めるのか？

- 全部を集める⇒**原則的無節操の原則**
- ただし、「全部」は無理なので、「なんでも」集めるというのが現実的(当面の資源不足)
 - 評価済み研究論文(雑誌掲載後論文)
 - 評価前研究論文(紀要論文を含む)
 - ある意味での出版機能の実現
 - ILLの減少効果
 - 著書・教科書・辞書項目・ハンドブック分担等等
 - データベース・ソフトウェア・公演・展示・設計などの「非論文」成果
 - 研究基盤となるデータ共有の支援
 - などなどなどなど

どのように集めるのか

- 「集める」のではなく教員・研究者が機関リポジトリに掲載する ⇒「著者の権利」に基づくセルフ・アーカイビングの原則(著作権の問題はこれで解決済み)
- もちろん、本人は忙しい(?)のでやるわけないが、図書館は原則として「お手伝い」サービス
 - 保存・共同利用の観点からのフォーマットの制御、メタデータ管理・インデクシングの支援(それでも新しい課題
続出:たとえば、メタデータとしての画像サムネール)
 - とはいえ、著作権処理(でも前向きに対応(「だからできない」でなく「こうすればできる」が大事))

どのように見せるのか

- とくにがんばって見せない⇒他力本願の原則
- あんまりがんばってポータルは作らない
 - コンテンツ利用者は外部のサービスから直接というのが全般的状況である以上、トップページには象徴的意味しかない
 - 検索エンジンとの連携：千葉大学の場合はScirusを利用(サイト内検索では面白くないし、トップページには誰も来ないので)
 - OpenURL解決機能の利用：千葉大学の場合には北大AIRwayに便乗

図書館協力の新たな方向性

- 大学に不可欠といっても、すべての大学が作るわけではない⇒**オプトイン的組織化**
 - これまでの「協力」は、「すべての大学」になりがち
- 電子的資料の共有であることを明確に！
 - 紀要掲載論文へのILLは国内雑誌掲載論文依頼の20%以上だが、それをゼロにできる
 - 「品質保証完璧」の学術情報は、「買っている」。買った資料との関係を明確にする必要がある（「自館にはないが、他館にあるのでそれを提供」の新しい意味）
 - 「資料提供」サービスから「所在情報提供」サービスへ